

葛藤を乗り越えて得られた 心と心のふれあい。

小田原教会 渋谷委巴さん

結婚から10年目を迎えたある日、渋谷さんは夫に「離婚するか、私と子どもたちと一緒にこの家を出るか決めて!」と迫った。結婚後に始まった義父母との同居生活が思うようにいかず、心が悲鳴をあげたのだ。そして、半ば強引に別居。開放感に満ちた新しい生活がスタート。——だが、中学生になった長男が家庭内で暴力を振るい、学校を休むようになる。おとなしく、やさしい性格だった長男の豹変ぶりに戸惑う日々…。そんなとき、ある人に諭され自分を振り返り、はたと気づく。「いまの長男は自分の姿そのものだ。義父母に対して心を閉ざし、力任せに別居に踏み切って、変わるべきは自分なのだ」と。その思いを胸に、これまでの振る舞いを詫言ると、義父母は責めることなくやさしい笑顔で受け入れてくれた。渋谷さんは、素直に心を開いて人とふれあうと、こんなにもあたたかな世界が広がることを知り、「もっと多くの人とぬくもりのある心と心のふれあいができる自分になりたい」と心に誓った。



「仏」を供養する

人は、死んだ人に手を合わせることはできても、生きている人にはなかなか手を合わせることができないといわれますが、亡くなった人も生きている人も同じ「仏」であれば、目の前の人に「恭敬・尊重・讚歎」の気持ちを示す「供養」を行なうのも、不思議な話ではないどころか、むしろ当たり前のことです。では、具体的に何をするのか——「人の悩み苦しみが少なくなるように、楽しみが多くなるように」と願って、人を思いやることです。

それが、目の前にいる「仏」に対する供養であり、ひいては、修行・精進を重ねて得た真実を説いてくださった釈尊、つまり「仏さま」への感謝と尊崇の気持ちをこめた供養となるのです。こうして私たちは、思いやりがあふれる人間になるにつれて、「仏」に近づけるでしょう。

私たち一人ひとりを一枚の布にたとえれば、みんな「仏」になる資質をもったすばらしい「布」です。そこに慈悲——思いやり——の実践という裏地が施されると、「仏」という最高の「衣」になるといふことかもしれません。

立正佼成会